



庄内町みんなが主役のまちづくり交流会
まちづくりは人づくり、地域の元気づくりから

仙台高等専門学校 建築デザイン学科
准教授 小地沢将之 (こちざわ まさゆき)

目次

0. 自己紹介

1. 「庄内町みんなが主役のまちづくり基本条例」とは何か？

○ 3つの大事なポイント

2. 「みんな」って誰？

○ 人的資源の活用
○ 物的資源の活用

3. 「みんな」の参加の事例

○ 蕨岡まちづくり計画（遊佐町）への若者の関与
○ 東六地区個性ある地域づくり計画（仙台市）の成果

まちづくりは人づくり、地域の元気づくりから

地域課題の解決に市民総参加で取り組む時代の到来

● 地方分権一括法（2000）

◎ 地方自治体の役割の拡大
= 住民自治の原則

● 社会教育法（2008改正）

◎ 学校・家庭・地域住民等の連携や協力を促進
= 住民の役割は集落自治だけではない
(ましてやの生涯学習の受益者に甘んじてはならない)

* 市町村ごとに「みんなが主役」になる方法の開発へ

● ニセコ町まちづくり基本条例（2001）を皮切りに
みんなが主役のまちづくりの実現を目指す時代へ

ところで
みんな
って誰??

6

自己紹介

アーバンネット（仙台市／1999～）

農村サポートセンター設置事業（宮城県登米市／2004～2006）

東六地区個性ある地域づくり計画策定事業（仙台市／2004～2006）

- みんなで関わる
- みんなで意見の違いを知る
- みんなで考える
- みんなで情報を共有する

『復興への提言～悲惨のなかの希望』（東日本大震災復興構想会議／2011.6.25）

* 復興構想7原則

- 【原則2】被災地の広域性・多様性を踏まえつつ、
地域・コミュニティ主体の復興を基本とする。（後略）
- 【原則7】今を生きる私たち全てがこの大災害を自らのことと受け止め、
国民全体の連帯と分かち合いによって復興を推進するものとする。

有事における当事者意識のみならず
日頃からの当事者意識が鍵である！

事例「蕨岡まちづくり計画」(山形県遊佐町)

人口2,000人あまりの農村地帯, 高齢化率32.6%

- ★高齢者世帯(一人暮らし, 夫婦, 親子)の増加
- ★少子化により2030年(平成42年)までに小学校は統廃合へ

地域資源に恵まれている(歴史・自然・温厚な人間性)

- ★地域の将来ビジョンづくりに着手
- ★「計画づくり」にも「実践」にも「みんな」の参加を目指す

よそ者・若者の声が反映されにくい現状

- ★計画づくりを前に、まち歩きを行いながら、酒田光陵高の生徒や東北公益文科大学の学生がゼミ活動を実施

蕨岡地区まちづくりゼミ報告会(2013.10.12)における学生らの提案

- スマートフォンによる情報共有の提案,
- 田舎らしさを逆にとったテーマパークの提案など
- …「どうすれば自分たちも住みたいと感じられるか」という視点

【事例紹介】仙台市東六地区のまちづくり



- ▼個性ある地域づくり計画策定事業(2004~2005年度/仙台市青葉区)
 - *地域づくりの方針づくりを小地沢が支援
 - ⇒「東六小の桜と音楽を愛でる会」を2006年度から開始

- ▼コミュニティ活性化モデル事業(2009年度~/仙台市青葉区)
 - *地域情報誌の発行を決定, 市民記者の育成開始
 - ⇒2011年3月創刊

連合町内会・商店街・小学校PTAら
多様な主体が地域づくりを実践している

【事例紹介】仙台市東六地区のまちづくり

- ◎震災時、JR仙台駅周辺で被災した観光・ビジネス客が駅から最寄りの東六番丁小学校の校庭に殺到(1,800人超)

⇒マニュアル通りの避難所開設行程では対応しきれないと即断し、校長が体育館を開放。町内会連合会では避難者支援を開始。

⇒収容しきれない避難者を教室やコミュニティセンターにも移し、3月末までに無事全員を帰還させた。

- ◎震災対応のモデルケースとして世界防災閣僚会議で報告(2012年7月)

- *強固な信頼関係 …さまざまな主体の迷いのない関与
- *規範意識の高さ …非常時でも新たなルールづくり
- *連携の良さ …地域住民と小学校などの連携

今日の目標

*実践事例発表

【知る】

- ◎個々人の得意な力をまちづくりに活かしている人たちを知る

*情報交換会

【知る】

- ◎すでに活動している人たちの悩みを知る

【関わる】

- ◎その悩みの解決のために何ができるのか一緒に考える

【活動する】

- ◎それぞれの次の一步を踏み出す

大震災直後の東六小避難所運営

地域の絆が結んだ『もてなし』の心。



大震災からしばらく時間がたった頃、フェイスペインクやツイッターで避難所となった東六小学校が話題となりました。人々はこの避難所での対応をそれぞれにつぶやいたのでした。その多くは後日、東六小学校へも次々と届いたメールと同様の感謝の言葉がこぼれ出ていました。

3月11日大震災以降に何があつたのか、震災から早7ヶ月を迎えようとしている現在、鮮明に記憶に残る光景を当時の状況と体験談を交えながら地域を代表して東六小学校渡部力校長先生、東六地区連合町内会長海老一朗さん、日赤奉仕団副団長菊池ゆう子さん、そして炊き出しをした主婦の四人の方にお話を聞きました。

1800人を超える人と人

『東六小の避難所に避難した多くの人は旅行、出張でたまたま仙台駅に居合わせた人』そう語るのは渡部校長。大震災直後仙台駅はいち早く閉鎖され、否応無しにそこから溢れ出した多くのビジネスマンや旅行者達は仙台駅に一番近い

小学校へとさみだれ的に集まってきた。『当初この小学校は地域住民の避難所と指定され開放される事になっていました』海老会長はそう語り、溢れ来る避難民を目にした地域の代表者は避難所指定されて居ないコミニティセンターや地区内の高等学校へと地域住民を誘導したと言う。そうして1800人もこの県外から来た避難者達は、雪が降りしきる寒さの中でこの小学校で数日間昼夜をともにする事になりました。



1800人もの県外からの避難者

日頃のそなえ

海老会長はこう振り返る。『この地域は6ヶ月前から防災実行委員会を組織し、発災時の役割分担を取り決めていた事が機能した』と話

す。毎年仙台市では6月12日の宮城県沖地震発災の日、小学校区で防災意識を喚起する実施訓練をしていたが、担当地区は持ち回りで決められていた。「それらの経験をした他地区が今回の震災で機能したかどうかは判然としませんが、東六地区連合町内会は真摯に受け止めて、訓練や組織の充実につとめて居たので良く対応できたのではないかと云う。



廊下に避難する人々

地域のささえ

何故、この地区の避難所運営が上手く行ったのでしょうか。そう質問すると渡部校長は「学校と地域の住民との連携は常日頃の交流の賜物」と語った。明治の学政発布直後に出来たこの小学校には戦前はあるか前のPTAと言う概念すらなかった時期に、今で言う学校

支援地域本部的な組織が既にあり、機能していた歴史がある。地域の住民や商店街、同窓会にPTAさらに連合町内会と関連の各団体がこぞつてお金と人手と知恵を出しあつて、物故者慰霊の万燈会を仕立てた夏祭りの開催や図書充実、スクールバンドの楽器補助や学校整備費など、小学校全体のサポートをしていたと言ふ長年に渡る経緯があつた。

新しい力

また、「東六地区連合町内会では近年、連町役員に加えて地区各団体長、地域有識者を始め、東六小校長、PTA会長等の幹部、宮町商店街振興組合理事長を委員とする地域活性化コミュニティ委員会を立ち上げてこの地区の街づくりを積極的に進めており、東六小の桜と音楽を愛でる会や万燈会夏まつりの開催、地域情報誌038プレスの発刊等、住民の交流と郷土愛の醸成によるまちの活性化を推し進めている」と海老会長は語り、普段からの地域や学校、住民との絆を強調した。

手と手

『発災を期に実行部隊として校長先生を頂点とした教職員と連合町内会長を頂点とした組織が昼夜を問わず統率がとれた組織戦を敷いて、私達町内会役員をはじめ地域の各団体も無我夢中で対応しました』と語るのは菊池ゆう子さん。菊池さん達がつくる小さなみかん大のおにぎりは皆の空腹を和らげ、急遽コミセンから持ち込んだ投光器は皆の心に灯を点した。『被災者のほぼ全員が地域外からの来訪者で、着の身着のままと言ふのは運営側とて同じ状況下でした』と菊池さんは続けた。学校運営の再開と言ふ命題も抱えていたが、早朝から深夜に至るまで、徹夜も含め先ず避難所のトイレ掃除や暖房機の給油をは



続々と避難する人々

じめとした居住環境の維持、食事の調達と調理、そして朝昼晩と入れ替わり立ち替わりして増減の激しい避難者を掌握し数を決めて配給するといふ難題も抱えながらも、皆で一致団結し明るく『おもてなしの心』で対処したと渡部校長。

広がる輪

当初いたわがままを言う者さえいつしか消えていた。例えば個人調査票を作成し、避難者の情報を把握して解決方法を一人ひとり模索しながら対処して行くようなマニュアルにはない事を続けました』と渡部校長は続けた。地域に住む50代の主婦は、「温かい汁物を飲ませてあげたい」と言ふ声を聞き、市・災対本部双方の了解を得た後、「持ち寄り炊き出しができないだろうかと友人2名に相談した。『食材、食器、調理の手伝いどんな支援でもOK』というメールは次々と広がり、発信の翌日昼には大鍋4つ分の具沢山味噌汁が出来上がった。避難している人だけではなく運営側の教職員・スタッフにも振る舞われ喜ばれたが、作り手からも「何かしたいと思つて

いたので自分もうれしかった』と言われた。その暖かさが身にも心にも染み渡り、お互い強く印象に残った。

避難者は10人減り50人減りと言ふ事を繰り返しながら避難所は3月25日に閉鎖された。



統率をとるためのミーティングの様子

た。『御札の手紙や役立ててくださいと言ふ寄付は言うまでも無く、感謝の気持ちを伝えたいと言ふ行為は今でも続いています』と渡部校長。

結び合う心と心

こうした避難所運営は常日頃の地域と学校の絆の証し、と海老会長は語り、続けて『その結果として渡部校長が言う『おもてなしの心』で対応出来たと言ふ事に結びついた』と言葉を結んだ。未曾有の大震災という想定を超えた事態に、規程やマニュアルには無い対応で対処せざるをえなかったそれぞれの立場と立場。実は『私達も被災者でした』が、『そう語るお一人おひとりの清々しい顔と顔。そこに見えてきたのはこの街に対するそれぞれの想い、そして何より、普段からの心掛けとお声掛け、そこから生まれてきた絆が結んだ『おもてなしの心』だった。

つぶやき

その頃から他の避難所の様子が報じられると、東六小の避難所運営がいかに素晴らしかったかと言ふ事を避難していた人々は気付きました。そうして避難者達の感謝の声はフェイスブックやツイッターというインターネットを介した「つぶやき」の形でそれぞれに発する様になる。その数は実に多かつた。その声はいつしか文部科学省へと伝わり、それを知ったメディアが報じるといふ事へとつながつ

避難所写真提供/大場勝彦氏

文/千葉富士男
写真/針生英一



日本酒醸造の工程について、茨木高芳社長(右)から説明を受けた = 遊佐町・杉勇蔵岡酒造場

東北公益大 + 酒田光陵高

酒田市の東北公益文科大と酒田光陵高が、次世代のリーダーを育成する合同の取り組みを始めた。第1弾は現地を歩いて地域の魅力を探る「遊佐町蔵岡地区まちづくりゼミ」。現地調査を28日に蔵岡地区で行い、酒蔵や神社を巡って住民らと意見を交わした。

次世代リーダー合同育成

第1弾、遊佐・蔵岡で魅力探索

庄内開発協議会から公益のふるさとづくり活動補助金を受け、今年7月にスタートした。蔵岡地区は、2016年度完成予定の蔵岡まちづくりセンターの設計に、小地沢将之同大大学院非常勤講師が関わっている縁で実施した。活動場所には他に酒田市中町や鶴岡市加茂を想定している。

ゼミは9月下旬に顔合わせをし、この日が2回目の活動。小地沢講師と大学生4人、高校生8人らが参加した。最初に訪れた杉勇蔵岡酒造場(茨木高芳社長)では普段は公開されない酒蔵内を見学、日本酒を造る工程を聞いた。年間で一升瓶5万本分を醸造し、多くが町内で消費されているという。

茨木社長は「温度管理には非常に気を使い、味がまとまるよう苦心している」と説明し「伝統産業を将来につなげるには、まず知ってもらうことが重要。地域の誇りと思ってもらえるようになりたい」と語った。光陵高2年の齋藤達也君(17)は「遊佐にはあまり来ないし、酒蔵見学も新鮮だった。酒を有名にしたい」、公益大3年の鈴木茉衣子さん(21)は「地域の役に立てるような具体的で、現実味のある提案に結び付けたい」と話した。

この日は鳥海山大物忌神社蔵岡口ノ宮、語り部の館なども見学した。今月12日に現地研修の成果を住民に伝える。ゼミの意見や提案は、まちづくりセンターの設計、地元が13年度内の策定を目指す「蔵岡まちづくり計画」に生かす。

地域資源保全対策として注目

サポーター
募集



ボランティアで
水路管理



お礼に
地域通貨

【宮城】登米市南方町の水土里（みどり）ネットはさまがわ（迫川沿岸土地改良区）では、「農村サポートセンター」を設置して地域や都市住民からサポーターを募集し、ボランティアで水路の草刈りなどの作業を行う新しい試みに取り組んでいる。



水土里ネットはさまがわ

宮城県
登米市

「農村サポートセンター」設置

農村地域では、高齢化などにより地域の財産でもある水路等の土地改良施設の維持管理が難しくなっており、環境保全などの多面的機能の発揮への影響が心配されている。このため、ボランティアによる土地改良施設の維持管理を通して都市住民との交流や地域コミュニティを深めるもので、お礼として参加者には地



排水路沿いの雑草を防ぐためリシマキアを定植するサポーター

域通貨「水土里」を発行している。

サポートセンターでは7月31日、サポーター44人が参加して高石幹線排水路沿いに雑草の繁茂を防ぐグランドカバーのリシマキアを定植した。6月にはリシマキアの苗を育苗箱に株分けしており、今回が2回目。また、子ども体験学習として6月に植えたサツマイモ畑の草取りも行われた。

サポーターには、1時間間のボランティア作業に対して地域通貨100水土里を交付、サポートセンターが主催するイベントの参加費や近くの道の駅「もっこりの里」で買い物や食事に利用でき、参加者に好評だ。当日は、2時間の作業を終えた排水路でカヌー教室が開かれ、サポーターは早速100水土里を使って参加し交流を楽しんでいた。

サポートセンターでは「今後担い手農家だけでは水路などの維持管理が難しくなり、地域や都市住民の協力が欠かせな

い。地域通貨は、作業に協力してくれたサポーターへの感謝の気持ち。制度への理解と通貨の道の駅以外の利用をどう広めるかが今後の課題です」と話していた。

サポーター登録は、インターネットまたはファクスなどで随時受け付けている。問い合わせ先は、水土里（みどり）ネットはさまがわ（電話番号0220・58・2024）まで。